

(別紙)

## 病院医学教育研究助成成果報告書

### (1) 研究題名

WWAMI ナースプロジェクト～大学病院と地域をつなぎ継続看護をめざす看護連携～

### (2) 研究組織等

#### 研究組織の名称

WWAMI ナース会

#### 研究責任者名(所属)

勝部久美子(島根大学医学部附属病院看護部)

#### 共同研究者名(所属)

吉岡みち子 高橋まゆみ 家本美佳 荒木もも子(看護部)

中谷久恵 大森眞澄(島根大学医学部看護学科)

澄川和子(陽循環器内科クリニック)

### (3) 研究費及び研究費の用途

#### 研究費

190,000 円

#### 研究費の用途

大学病院看護師研修時の宿泊費、交通費用、文具、IC レコーダー、学生資料整理の謝金

### (4) 目的及び方法、成果の内容

#### 目的

島根県は東西に長く中山間地域や離島を持ち、少子高齢化が急速に進む県である。本県にとってへき地医療の充実は大きな課題であり、慢性疾患や障害を有しながら地域で暮らす人々の健康を支援する看護の質が問われている。島根大学医学部はこのような現状に対し、教育的役割を発揮することが地域社会から求められている。そこで、高レベルの地域医療を効率的に行うことができるシステムの開発、へき地医療の充実と家庭医を中心とした医療人養成教育の一環として「日本版 WWAMI プログラム」を行ってきた。看護職としてこのプログラムに参加し、米国、オーストラリアにおける Rural Health の実際から学んだことは、島根県のへき地医療の実際を知り、そこで暮らす人々が受けている医療や生活に根付いた看護の必要性を理解し、大学病院の高度医療と地域医療とを継続看護により看護職がつなぐ役割の重要性であった。しかし、看護連携における課題は多く、困難を感じる看護師は少なくない。大学病院の看護師と地域医療を担う看護師が、相互の実態を把握し交流を持つ事で、双方にとって「顔の見える連携」の一步となり、看護連携の質の向上につながると考えた。

そこで、本研究では大学病院と地域中核病院で働く看護師が、相互の研修を通して看護の機能と役割を理解し、看護連携における相互の課題を明らかにすることを目的とした。

## 方 法

### 1) 調査対象

大学病院での研修に参加した地域中核病院看護師（以下、地域中核病院看護師）  
地域中核病院 A 病院での研修に参加した大学病院看護師（以下、大学病院看護師）

### 2) 調査期間

平成 20 年 7 月 25 日～平成 21 年 3 月 31 日

### 3) 調査内容

地域中核病院看護師と大学病院看護師が互いに提供している医療・看護を体験するため、大学病院の診療部長への意見聴取や、研修先となる地域中核病院を研究者らが事前に視察し、そこでの体験内容をもとに研修プログラムを作成し、実施した（表 1、2）。研修実施後、参加者にアンケート調査及び、グループインタビューを行い、看護連携について質的データを収集した。アンケート調査は、実務経験年数、研修への参加動機を選択し、研修に対する評価を「研修内容は満足のものであったか」「研修時期・期間は適切であったか」「研修での学びの活用度」「今後このような研修会を病院スタッフに勧めるか」の質問に対して 5 段階評価で回答してもらった。さらに、地域中核病院看護師、大学病院看護師が互いに望むことを自由に記載してもらった。

表 1 . 大学病院研修プログラム

1 日目	地域医療連携センターとの交流会 緩和ケア認定看護師との交流会 緩和ケアカンファレンス見学 放射線治療部見学
2 日目	附属病院病棟見学 NST スタッフとの交流会 外来遠隔診療見学 看護専門外来師長との交流会 糖尿病認定看護師との交流会

表 2 . 地域中核病院研修プログラム

1 日目	訪問看護・訪問リハビリの見学 介護老人保健施設・グループホーム等の見学 小規模公設民営病院における医療連携への挑戦（ミニレクチャ） NST・リハビリカンファレンス見学
2 日目	在宅療養支援診療所・往診サービス見学 看護師・各専門職との交流会

#### 4) 倫理的配慮

本研修の参加者には、研修の趣旨を口頭、文書にて説明し同意を得た。また、調査によって得られた内容は研究以外には使用しないこと、分析結果の公表について同意書にて同意を得、個人情報保護を堅く厳守することを口頭にて説明した。

### 成 果

#### 1) 参加者の概要

大学病院研修に参加した地域中核病院看護師は 4 人(平均実務経験年数 22.3 ± 2.9 年)、地域中核病院研修に参加した大学病院看護師は 6 人(平均実務経験年数 12.5 ± 10.2 年)であった。研修に参加する動機は、「看護の連携に興味があった」を選択した者が地域中核看護師(3 人)、大学病院看護師(5 人)と最も多かった(表 3)。

#### 2) 研修後アンケート結果

研修に対する評価は地域中核病院看護師、大学病院看護師ともに 4 つの質問において全て肯定的評価が得られた(表 4)。互いに望むことの自由記載では、地域中核病院看護師は大学病院看護師を“遠い存在”と感じていた。そして今回の研修を通して同じ悩みを持ちながら日々看護にあたっていることが分かり、親近感が持てたと評価しており、今後もこのような研修を通して互いに交流できることを望んでいた。大学病院看護師は、地域中核病院を患者様がより満足した在宅療養が行えるための中継地点と捉えており、医療的手技の指導や在宅療養に向けての支援の継続を望んでいた。さらに大学病院、地域中核病院の持つそれぞれの役割を理解し、それを地域住民へ浸透させてもらうことも望んでいた。

表3 . 参加者の概要と参加動機

	地域中隔病院看護師	大学病院看護師
参加人数	4人	6人
平均実務経験年数	22.3±2.9年	12.5±10.2年
研修への参加動機（複数回答）		
・看護の連携に興味があったから	3人	5人
・継続看護に行詰りを感じる	1人	2人
・看護実践力を高めたい	0人	1人
・大学病院の機能を知りたい	2人	1人
・地域看護の機能を知りたい	1人	2人
・職場の上司の勧め	3人	3人

表4 . 研修後アンケート結果

設問		地域中隔病院看護師（4人）	大学病院看護師（6人）
研修内容は満足いくものであったか？	満足している	3人	6人
	やや満足している	1人	0人
	どちらでもない	0人	0人
	やや満足している	0人	0人
	満足していない	0人	0人
研修時期・期間は適切であったか？	適切である	3人	3人
	やや適切である	1人	3人
	どちらでもない	0人	0人
	やや適切でない	0人	0人
	適切でない	0人	0人
研修での学びを活用できるか？	活かせる	2人	4人
	やや活かせる	2人	2人
	どちらでもない	0人	0人
	やや活かせない	0人	0人
	活かせない	0人	0人
今後このような研修会を病院スタッフに勧めるか？	勧める	4人	6人
	やや勧める	0人	0人
	どちらでもない	0人	0人
	やや勧めない	0人	0人
	勧めない	0人	0人

### 3) グループインタビューの結果

<地域中核病院で研修した大学病院看護師6人へのグループインタビュー>

研修が終了後、大学病院看護師6人を対象に、1時間のグループインタビューを行い大学病院で働く看護師としての役割・機能の認識の変化に焦点を当て4つのカテゴリーを抽出した。表5より、サブカテゴリー「」、カテゴリー【 】を以下に述べる。

訪問看護や訪問リハビリに同行して利用者の自宅を訪問し、寒さや段差といった治療には悪条件の「想像を絶する環境でも成り立つ療養生活」を目の当たりにし、「療養生活を支える医療の重み」を担う看護師として治療よりも生活が優先する在宅療養の知識があまりにも不足していたことを反省すると共に、【在宅療養の価値観の転換】へとつながっていた。「できていたはずの退院指導」が実は「訪問看護への責任転嫁」で終わっており、その背景には「大学病院でできる退院指導の限界」や「看護学生時代の不十分な訪問看護の知識」では通用しないことを認識し、大学病院の看護師として今後取り組むべき継続看護への課題は【退院指導を重視した視点と看護連携】であることに気づくことができていた。さらにその認識をより強化した体験は、A病院の職員から感じた「職場への愛着」と「職種を超えた職員のつながりと団結」であり、院長や看護部長が管理職としての一線を引きながらも職員と自然に交わっている光景に触れ、職場である病院が【理念と雰囲気づくりから始まるチームケア】を実践していることを学んでいた。これを教訓に「大学病院の中では見えなかったこと」を振り返り、「大学の看護師としてできる実践」が何であり、そのために「看護師として将来の自分を描ける看護」をしなければならないことを認識していた。すなわち【患者や自分の将来のビジョンが描ける看護実践】こそが、大学病院の一看護師として地域病院との看護連携につながる役割や機能を果たすことであることを語っていた。

### 4) まとめ

アンケート結果より、地域中核病院の看護師と大学病院に勤務する看護師のどちらも研修後の満足度は高く、看護連携を進めていく上で意義ある相互研修であったと思われる。研修への参加動機では「看護の連携に興味がある」が最も多く、看護連携における関心の高さが推察される。地域中核病院看護師は大学病院看護師を“遠い存在”と感じていたことも明らかとなり、これまでいかに交流がなかったかが示唆された。大学病院看護師は、在宅における療養生活の実態も十分に把握できていなかった現状や、大学病院の中では見ていなかったことに気づき、大学病院の看護師の機能と役割は何かを考える一歩となっていた。

今回の研修では看護連携における相互の課題を明らかにすることを目的としていたが、現状の把握に留まった。今後この研修を継続することで、看護連携における相互の課題をより明らかにし、島根県における看護連携の質の向上を目指していきたい。

表 5 . 大学病院看護師としての役割・機能の変化

コード	サブカテゴリー	カテゴリー
療養環境が悪くても訪問看護や訪問診療で生活が成り立っていた 玄関から部屋への段差がある一人暮らしには不十分な環境だった 雪が降る地域で外の気温と同じ家がまだあることにショックを受けた	想像を絶する環境でも成り立つ療養生活	在宅療養の価値観の転換
往診する医師のいることが自宅に帰る手段だとわかった 想像している以上の田舎の環境で訪問看護を必要としていた 寝たきりの訪問リハビリを見て自宅に帰ることが現実化した	療養生活を支える医療の重みと自覚	
手すりは介護度によって借りれることをしなかった 退院後の生活が困らないところまで支援できていなかった その人が暮らす地域事情まで把握していなかった ADLだけがゴールで患者の背景を考慮していなかった	できていたはずの退院指導	退院指導を重視した視点と看護連携
退院が急速決まった事例もある 内服を自己管理にして誤薬されれば病院ではインシデントになる 病院の管理責任を超えて生活の看護を指導していくことは難しい	大学病院でできる退院指導の限界	
学生時に実習した家庭環境と違う人がたくさんいるとわかった 教科書や実習で学んできたこととギャップがあればイメージできない 訪問看護は学んだが日々の病院の看護でいっぱいになっている	学生時代の不十分な訪問看護の知識	
訪問看護が入ってくれば問題は解決すると思っていた 訪問看護師は内服確認の方法を一つ一つ検討していた	訪問看護への責任転嫁	
A病院は団結している感じがした 自分の病院を愛して仕事をしている感じが伝わってきた 会社でいえば職員に愛社精神の思いがある スタッフ全員が明るくやりがいを持って仕事をしている	職場への愛着	理念と雰囲気づくりにから始めるチームケア
喧嘩も利害関係もあるが対等に言いみんなで動ける環境がある 挨拶が徹底できている職場の雰囲気があった 事務とか医師とか看護師が隔たりなく接している 院長も看護部長もざっくばらんに話しをして情報を得て指導していた 看護だけでなく介護や診療連携の視点があった	職種を超えた職員のつながりと団結	
大学病院では在宅の現場や現状を知る機会がほとんどない 地域病院も現実の中では無力感や疲労がある 人手不足といっても私達は恵まれたマンパワーがある	大学病院の中では見えなかったこと	患者や自分の将来のビジョンが描ける看護
大学病院は大きくて挨拶とかできないとあきらめたらダメだ 病棟に帰って話していいが看護師全体が地域に目を向けられる 自分から積極的に地域に目を向けていく努力をしなくてはならない 退院後に必要とするケアを知るには患者を観察し話を聞いていく 個別性をとらえた添書を書かないといけない	大学病院の看護師としてできる実践	
先を見通し自分がどうなりたいかがないと業務に埋もれる 5年後、10年度の自分のビジョンを持って働いていたかなと思う 看護師免許をもらったときの思いが薄れてきたのに気づいた	看護師として将来の自分を描ける看護	